



平成 27 年 8 月 14 日

各 位

会 社 名 昭和ホールディングス株式会社
代表者名 代表執行役社長 重田 衛
(コード番号 5103 東証第二部)
問合せ先 執行役財務総務担当 庄司 友彦
(TEL. 04-7131-0181)

「当社2016年3月期第1四半期決算解説」

～ファイナンス事業の成長により増収増益～

当社はこの度、2015年8月14日に2016年3月期第1四半期連結経営成績を発表いたしました。同期間におきましては主に当社の最も重要な子会社でありますタイ証券取引所一部上場企業 Group Lease PCL の展開するファイナンス事業が成長することにより、増収増益を達成いたしました。これにつき投資家の皆様に解説申し上げます。

1、増収と大幅利益増

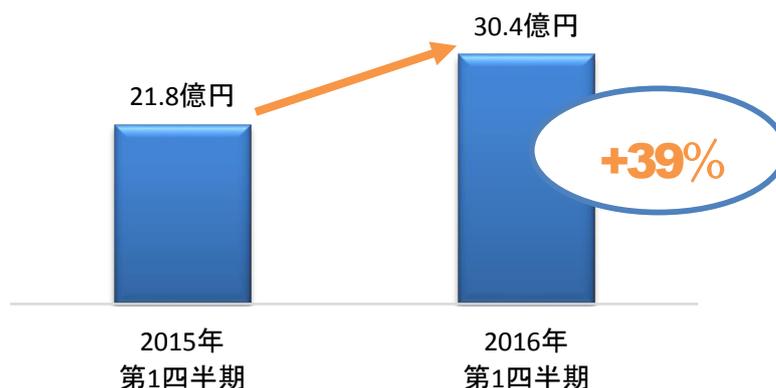
当期間における損益計算書は以下となりました。

(百万円)

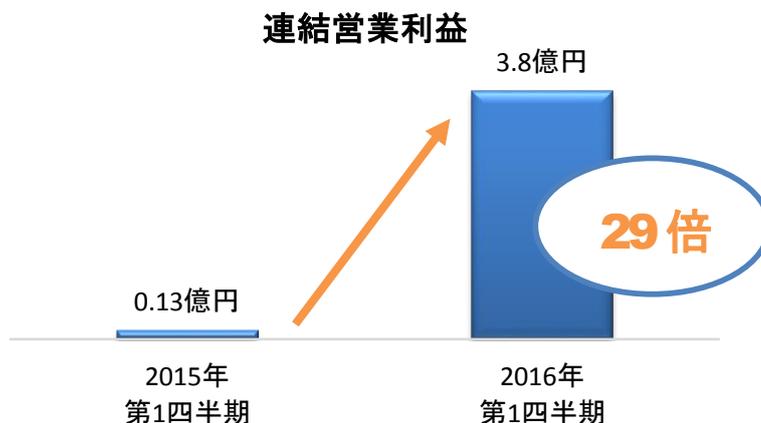
	2016年3月度 第1四半期実績	2015年3月度 第1四半期実績	対前年比
売上高	3,041	2,181	139.5%
営業利益	380	13	2870.5%
経常利益	639	54	1181.6%
四半期純利益	133	27	485.5%

連結売上高前四半期であります2015年3月期第4四半期に1四半期として史上初めて30億円を超えました。これを今第1四半期にも継続し、連続して30億円を超え、前年同期に比べ約40%の増加となっております。

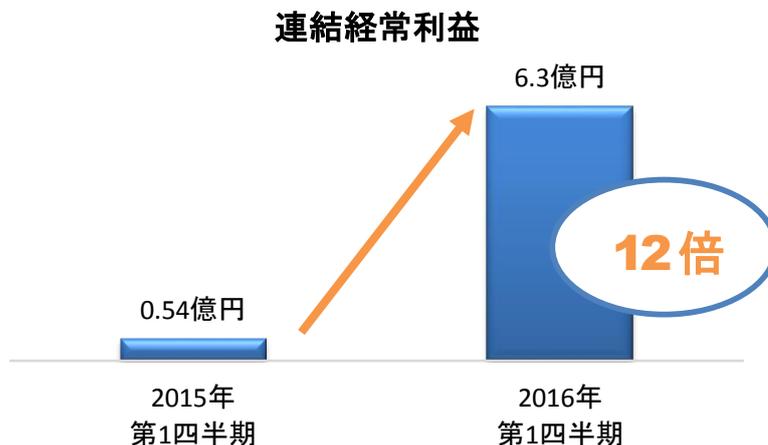
連結売上高



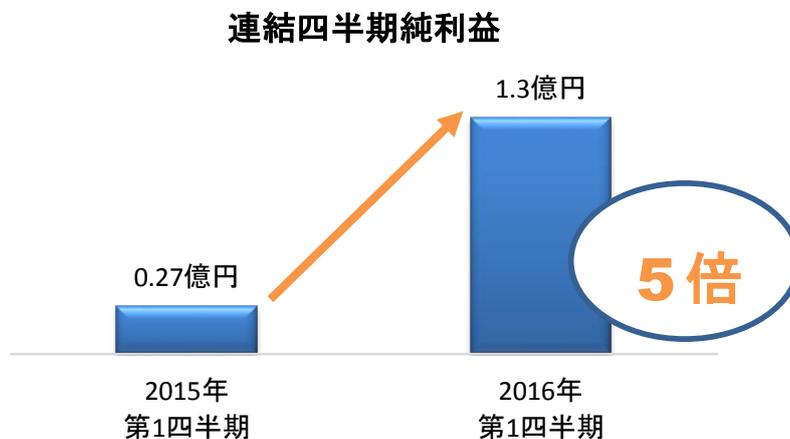
一方利益については、営業利益は3億8千万円で前年同期に比べ約29倍



経常利益は6億3千万円で前年同期に比べ約12倍



四半期純利益は1.3億円で、前年同期と比べ約5倍となりました。これは連結事業が好調であったことに加え、持分法適用関連会社が行う事業が好調であったことによります。



*なお当社子会社株式会社ウェッジホールディングスが計上致しました持分変動利益は会計基準適用時期の違いから当社連結成績には反映されません。

2. 決算の要因解説

このように大幅に増収増益を果たしました最大の要因は、当社の重要な子会社となりますタイ上場ファイナンス Group Lease PCL が大きく成長したことによります。ファイナンス事業は売上高が72.5%増、セグメント利益が11倍と大きく増加いたしました。

これは同事業が2012年から進めておりました ASEAN REGIONAL FINANCE COMPANY VISION (ARFC VISION)に基づき ASEAN 全域に展開しつつ、審査・回収・遅延債権処理の基準や手法を厳格に高度化したことによります。

*ファイナンス事業につきましては当社子会社であります株式会社ウェッジホールディングス(JASDAQ 2388)の決算解説をご参照ください、当社とウェッジ社の CEO を兼務する此下竜矢が詳しく解説しております。

株式会社ウェッジホールディングス ウェブサイト

<http://www.wedge-hd.com/IR/topics/2015/p20150814.html>

解説動画 URL

http://youtu.be/J_jSBCwkXiA

ファイナンス事業 セグメント売上高比較



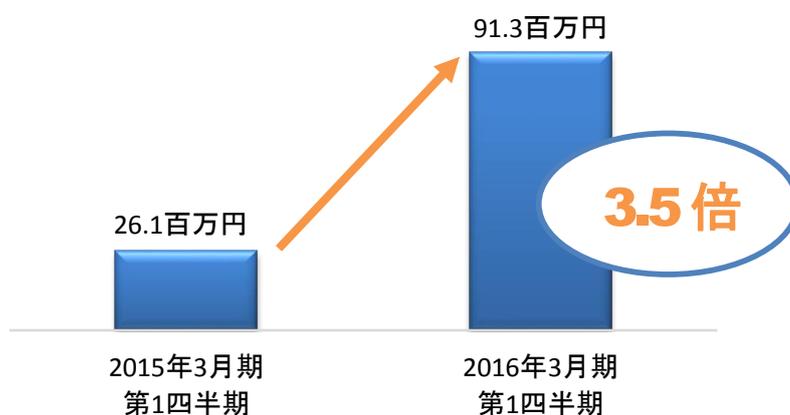
ファイナンス事業 セグメント利益比較



その他の事業セグメントにおいては、スポーツ事業が費用を抑制する中で減収増益と好調を維持し、事業の端境期にあたるコンテンツ事業は企画開発営業の仕込み期にあったため大幅な減収減益となり、長期的な再建過程にあるゴム事業は増収を果たしたものの赤字に転落いたしました。

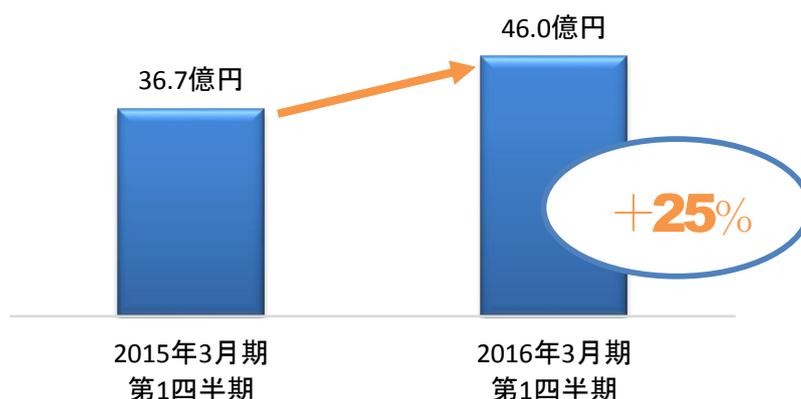
また当社の持分法適用関連会社が行います事業は好調でした。日本全国のスーパーマーケット様を顧客とする食品事業は本年5月に東西両事業部が月間過去最高売上を達成するなど好調を保ち、営業利益が3.5倍に増加しました。同事業は日本国内で行う事業の中で最も利益貢献する事業となっております。また、タイ王国ピピ島で五つ星ホテル Zeavola Resort を経営しておりますリゾート事業は過去最高益であった昨期を超える利益を計上し、2014年に各種のヨーロッパの国際的なホテル賞を獲得したことが成果に結びつきつつあります。

食品事業 営業利益比較



この結果、当社の主な持分法適用関連会社を含めましたグループ売上高は第1四半期において1四半期として過去最高の46億円となりました。当社は本年発表しました中期経営計画「アクセルプラン2015 ギア2「加速」」においてこれを2018年3月期には400億円(1四半期平均で約100億円)とする計画です。

SHD グループ売上高比較



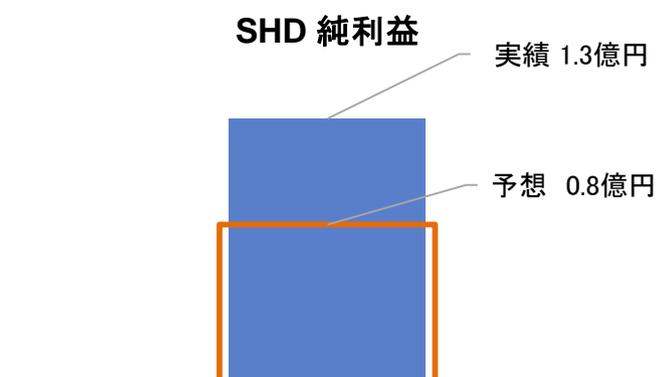
3. 対業績予想進捗

2016年3月期業績予想に対する業績の進捗状況といたしましては以下のようになっております。通年、上半期の予想に対して、第1四半期25%の期間を経過いたしました時点、売上高は順調であり、営業利益は遅れをとっております。持分法適用関連会社の好調を受けて経常利益は好調に推移しております。四半期純利益は1億33百万と上半期予想を超え、通年の予想に対しても88.9%を達成いたしました。

業績予想につきましては今後の様々な環境要因や想定外の事態などのリスクを慎重に勘案し、現時点では据え置きます。今後事業がさらに進捗し合理的に修正するべきだと判断しました時には修正致したいと考えております。

(百万円)

	2016年3月度 第1四半期実績	2016年3月期 上半期予想	進捗率	2016年3月期 通期予想	進捗率
売上高	3,041	5,800	52.4%	11,500	26.4%
営業利益	380	1,000	38.0%	2,000	19.0%
経常利益	639	1,000	63.9%	2,000	32.0%
四半期純利益	133	80	166.7%	150	88.9%



4. 今後の見通し

今後の2016年3月期の見通しといたしましては、現在好調なファイナンス事業は①カンボジア事業②ソーラーパネル・M4C などの新規ファイナンス商品③事業が開始したラオス、の3点を軸に、成長がさらに加速する見通しです。また①成長するカンボジア事業利益②利益率の回復が鮮明になったタイ事業③5月に免許交付を受けて売上認識が開始したラオス事業、という要因があり、事業の成長とともに利益率の向上を予想しております。

スポーツ事業は日本で50%を超えるシェアを持つソフトテニスボールを軸にシェアよりも利益を重視しつつ、新規の営業方針と商品投入によって成長を目指しております。今後も堅実な業績が継続すると予想しております。

コンテンツ事業はすでに皆様にお知らせしましたように世界的大型コンテンツ「ドラゴンボール」のカードゲーム開発を受注しており、これが第2四半期より数年間継続的に収益貢献をすると考えております。このように当第1四半期を底に、同事業のコンテンツの端境期を過ぎ、ここまで投入してまいりました投資的費用が第2四半期より成果をあげると予想しております。

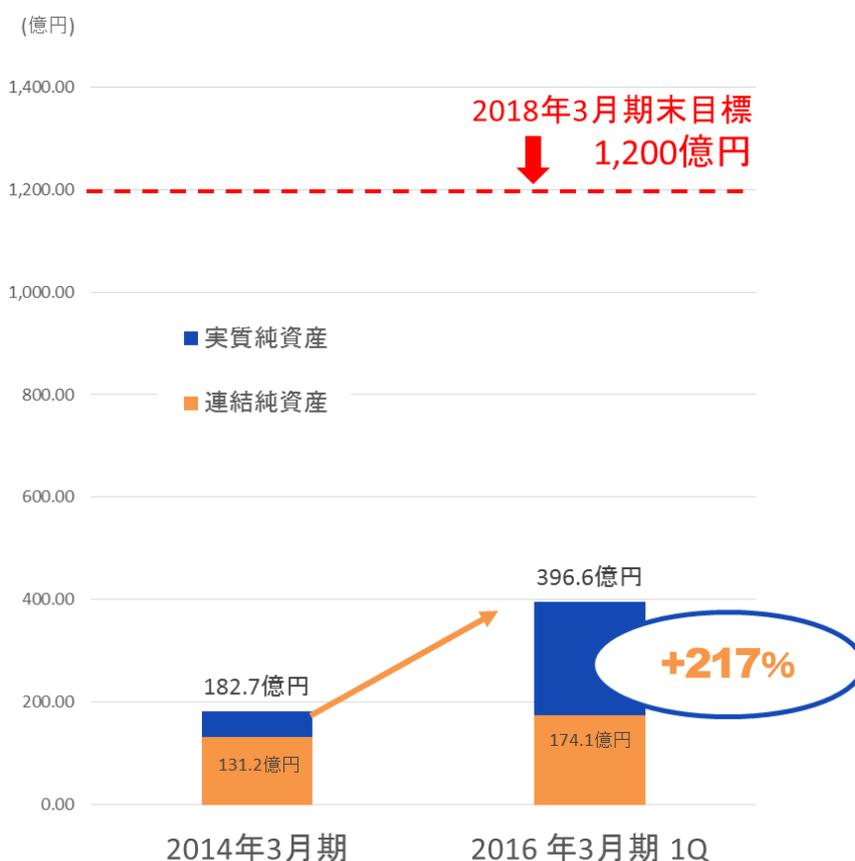
ゴム事業につきましては、同事業は40年近い長期の不振が続いており、これに対して長期的視点から建直しを図るとともに、アジア展開を進めております。すでに本年4月にはタイ AJINOMOTO 子会社のゴムライニング事業を継承致しましたが、インドネシア、ベトナム、中国におきましても一気に事業会社を立ち上げて、コア技術を元にアジア展開を進めてまいります。

食品事業におきましては、今後も好調が持続すると予測しております。同社は「わらび餅」の日本最大のシェアを持っておりませんが、猛暑によって販売が伸びることが予想されます。またお客様であります食品スーパーマーケットの業績が好調であり事業環境は改善傾向にあります。また、4月に発売致しました石川県能登半島の食材を活かした「能登街道シリーズ」が好評をいただいております、今後継続して販売する方針となっております。このような取り組みの蓄積を通じ収益が増加すると予測しております。

リゾート事業につきましては、①2014年に各種の国際的な賞を受賞した、②昨年は5月から10月にかけてホテルを全面的に部分的に閉鎖してのリニューアルを行っていたなどから、昨年比に利益貢献が増加すると予測しております。

5. 結語

当社が中期経営計画で重視しております項目は「実質純資産」につきましては、1,200億円を目指しておりますが、今四半期末におきましては396.6億円となり、2014年末に比べ2倍強と増加いたしました。



当社経営はこの度の決算結果は良い結果であったと考えております。また今後の見通しにおきましても楽観的な見通しを持てる状態にあると考えております。しかしながら、短期的に好業績をあげることが私どもの責務ではなく、各事業のポテンシャルを活用し、今後中長期的にはこの結果を数十倍にする成長を見せることが私どもの責務であると確信しております。今後とも、地道に事業に一意専心取り組み、大きく社業を成長させますことが、投資家の皆様、取引先の皆様、社員の皆様に答える唯一の道であると肝に銘じて経営を進めてまいります。

今後とも関係各位のご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

以上